大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第三十五卷　第五號

昭和七年十一月一日發行

論叢

多收手段としての酒税……法學博士　神戸正雄

笠間藩の民政……經濟學博士　本庄榮治郎

安定期經濟學と變革期經濟學……經濟學博士　石川興二

ロングフィールドの價値論と分配論……經濟學博士　堀經夫

研究

我國の市町村義務費に就いて……經濟學士　小山田小七

金爲替準備への再吟味……經濟學士　松岡孝兒

證券資本主義時代に於ける資本の構造……經濟學士　石田興平

カルテル法への要望……經濟學士　磯部喜一

說苑

貨幣の價値に就いて……文學博士　高田保馬

人口動態並行法則を論ず……經濟學士　三谷道麿

爲替相場の變動に就て……法學士　正井敬次

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

安定期經濟學と變革期經濟學

石川興二

一、序

社會生活の全體が行き詰り、其根本原因が經濟的事情にある今日、此現狀の打開に對して經濟學者の爲すなきことが非難せられつつある。人々は經濟學者が徒らに自己一身の安泰を求め、眞に世を思ふ誠意なきを慨嘆するが、經濟學者にとつてはこの問題は更に各自の經濟學の體系自體の問題となる。社會の變革期は經濟學自體の變革期である。今日までの資本主義社會の安定期の經濟學體系はそのままでは、變革期に役立ち得ない。茲に於て私は安定期經濟學と變革期經濟學について考へて見たいと思ふ。

二、變革期に於ける安定期經濟學と變革期經濟學

人々は常に一定の社會的制度の規定の下に於て生きて居る。この制度はもと人間の生命よりの表現であるが一度成立したる制度はそれ自身の原理に從つて、其下に社會の人々の生命を規定し

つつ自ら發展して行く。社會の人々の生命はこの制度と調和して居る限りこの制度のもとに成長をつづける。然しかく發展し行く制度と生命とは遂に矛盾に陷り社會の人々の生命は最早や既存の制度の變革なくしては發展を續け得ざるに至る。これ生命と制度との辯證法的發展である。

今このことを具體的に我が國の歷史について述べるならば、封建的制度の下に於てその發展をつづけて行つた日本の國民的生命は德川時代の終りに至つて最早やこの制度の下に於ては發展し得ざるに至つた。これ封建制度と日本の國民的生命とは矛盾に陷り封建的制度は變革期に到達したのである。『五箇條の御誓文』に「我國未曾有の變革」とある明治維新は、この封建制度を變革し新に資本主義制度を打立てるに至つた。而して封建制度の下に於て一度その發展の行き詰まれる日本の國民的生命はこの新なる資本主義制度の下に於て新なる發展を續けた。然しこの資本主義制度はそれ自身の原理に從つて發達して行き遂に日本の國民的生命の發展と矛盾に陷るに至つた。即ち今日に於てはこれを國民の經濟生活について云へば、資本主義制度の經濟的無政府狀態は愈々顯著となり恐慌は益々其度を加へ、社會の有する偉大なる經濟的生產力も、最早やこの制度の下に於てはこれを國民の經濟生活の爲めに十分に發揮し得ず數百萬の失業者を出し缺食兒童數十萬を算しその背後には糊口に窮する幾千萬の國民を有するに至つたのである。これを他の文化域について云へば資本主義制度の個人主義的唯物主義的原理は我國民の政治生活、敎育生活、思想生活、社會生活、宗敎生活、藝術生活等一切の文化生活を墮落せしめつつあることは嘗て述

べたるが如くである。[1] かくて今日資本主義制度は國民的生命の發展と矛盾に陷つたのであつて、この資本主義制度を保持する限り我國民的生命は愈々墮落せざるを得ない事情に立ち至つた。茲に於て我國民的生命の新なる發展はこの資本主義制度を止揚し新なる制度を確立することによつてのみ初めて望み得られるのである。

即ち一の社會制度はかくの如く社會の人々の生命の發展を助長し、然る後また壓迫するに至るものであるが、其が助長調和する限りに於てはこの制度を保持安定することが其社會の人々の生命の發展の爲めに必要なることである。故にこの時期を一つの社會制度の安定期と云ふことが出來るであらう。これに反して生命と制度とが矛盾するに至ればこの制度を變革することが社會の人々の生命の發展の爲めに必要缺ぐ可からざることとなる。故にこの時期をその社會制度の變革期と呼ぶことが出來るであらう。

かくて安定期に於ては制度を安定に保持することと社會の人々の生命を重ずることとが全く一致するのであるが、變革期に於ては制度を保持せんとすることと生命の發展を重んずると云ふことは兩立し得ないのである。即ち變革期に於ては制度を保持せんとすることは社會の人々の生命を壓迫することとなる。而して社會の人々の生命を重ずると云ふことは社會の制度の變革に努力すると云ふことである。

以上社會制度一般について述べ來りしところは、經濟制度についても全く同樣である。かくて

1) 本誌八月號拙稿變革期の社會政策參照。

一つの經濟制度の變革期に於ては經濟學者がこの制度に對してとる態度が全く相反する二つの立場に分れることとなる。卽ち社會の人々の生命の發展を無視して既存の經濟制度を固持せんとする立場と社會の人々の生命の發展を重じて既存の經濟制度を變革し人々の生命の發展により適當なる新なる制度を將來せんとする立場とが卽ちそれである。卽ち前者は既存の制度を代表する立場であり、後者は社會の人々の生命を代表する立場である。

制度を變革せんとする立場は社會の安定期には人々の生命の發展を攪亂する危險なる立場であるが社會の變革期には眞に社會の人々の生命の發展を計る爲の健全なる立場となるのである。これに反し制度を保持せんとする立場は社會の安定期に於ては社會の人々の生命の發展を計る健全なる立場であつたが、今や社會の變革期に於ては社會の人々の生命の發展を阻止する甚だ危險なる立場と化したのである。卽ち生命の發展が既存の制度と矛盾に陷つたところの變革期に於て、社會の既存の制度を飽くまで保持しかくて社會の人々の生命の發展を壓迫し切り得たとするならば、社會の人々の生命はここに衰退することとなる。若し社會の生命にして未だ老衰し居らず、制度の保持により其發展を壓迫し切れざる時はこの制度の固持に對する生命の反抗を益々激化せしめ遂に暴力に訴へてまでもこの既存制度を打破せんとするに至るのである。これ卽ち革命であつて其結果は社會の人々の生命の發展に對して著しき損失を齎らすこととなる。かく變革期に於て既存の制度を固持せんとすることは最も危險なことであつて、決して社會の人々の生命を愛す

る所以でないのである。

かくて社會變革なるものは人間の文化が幼稚である程無意識的本能的になされ、從つて屢々暴力的革命的となり大なる犧牲を拂ふことは止むを得ないのである。これに反し人間の文化が進む程社會變革もまた意識的自覺的となり從つて改革的になされ得るのであり、またなされねばならぬのである。即ち社會變革がかく自覺的改革的になされるが爲めに社會の人々、殊に其社會の爲政者並に支配者階級の人々が、社會全體の人々の生命の發展の爲めには既存の制度を變革せざる可からざることを明に意識し、而して既存の制度がそれに向うて變革せらるべき新なる制度並にこの制度を實現すべき最善の方策を意識してゐなければならない。

而も人間生活に向つてかくも重大であり且つかくも複雜である智識は決して常識として十分なるを得るものではない。經濟學の最も重要なる意義も變革期の變革學たる點にある。かくてまた最も秀れたる經濟學は社會の變革期に於て生れ出でた變革學であつた。即ち經濟學祖アリストテレスに於て經濟學を含む人間生活の學問が實踐學として初めて打立てられた。このアリストテレスの實踐學は對象たる社會を變革する爲めの學であつた。また經濟學父アダム・スミスもかくの如き社會變革の學として經濟學を一科の學として打立てたのである。而してこのことはマルクスについても同樣に云ひ得るのである。

我國に於ても經濟なる語は本來經世濟民又は經國濟民より出たのであつて、その本來の意識に

於ける經濟學は國民又は社會の全體としての人々の生命の發展を計るべきことを究極目的とする學でなければならぬのである。而して國民の全體としての人々の生命の發展を計る爲めの最も重要なる問題は社會の安定期に於て既存の經濟制度の保持の下に於てよりも、社會の變革期に於て經濟制度を變革すべき際にあるのである。かくて資本主義的經濟制度の下に於て人々の生命の發展が總ての文化域に於て妨げられつつある今日に於てこそ經濟學者の最も重き任務があるのである。卽ち今日の經濟學者はこの資本主義制度を人間の生命の發展に最も適切なる制度に變革する爲めの變革期經濟學を確立することに努力すべきであつて、尙ほ依然として資本主義制度の安定期經濟學に止まつて居るべきではない。

かくて私は以下先づ固有又は狹義の濟經學たる[1]經濟理論、經濟史、經濟政策について安定期經濟學の構造と變革期經濟學の構造とを述べ現代經濟學の進むべき方向を考へて見たいと思ふ。

三、安定期經濟學の構造

安定期經濟學の構造は安定期に於ける安定期經濟學者の生の構造と聯關せしめて考察する必要がある。今資本主義について見るに封建制度の下に於てその發展が阻害せられたる生命は封建制度を打破し新に資本主義制度を確立して初めて新なる發展を續けることが出來たのである。故に新に成立せし資本主義制度の下に於ては封建制度の下に於ける生命發展の阻害の記憶が未だ消え

1) 本誌第二十五卷四號拙稿參照

ざる程人々がこの新なる制度の下に於ける人生的生命の成長を讃美し此制度を人間の經濟生活にとつて本質的な從つて永久不變なものであると考へるは極めて自然である。卽ちこの段階に於ける經濟學者は人間の生命を眞に愛するが故に新に生れたる資本主義制度を尊重するのであつて彼等にとつてはこの資本主義制度を變革すると云ふことは思ひもよらないことである。彼等は專らこの新なる制度の本質を知ることにつとめまたこの新なる制度の封建制度其他の過去の制度との相違を知らんとし而してこの制度の下に於て如何に生活すべきかを問題とするのである。かくて社會の安定期に於ては眞に社會の人々の生命の成長を思ふ人間的意識より安定期經濟學が成立するのである。

經濟理論　先づ理論經濟學について見よう。この段階に於ける人々は資本主義制度を永久不變なるものであると考へ人間の經濟生活の本質的なるものであると考へる。故に恰も物理學者が自然を見るが如き態度をもつて資本主義制度を研究する。かくて成立つものは資本主義制度の理論經濟學である。卽ちそこに於ては資本主義制度の普遍性 Allgemeinheit が云はば其切斷面たる組織的構造 systematische Struktur に於て研究せられるのである。かくの如き研究は資本主義社會に關する最も抽象的な研究であつて變革期經濟理論に於て初めて研究さるべき資本主義制度の發展的構造 Entwicklung-Struktur はここに於ては未だ問題とならない。かくてこの經濟學は數物學的經濟學であると云ふことが出來る。

この例を經濟學史に求めれば云ふまでもなくリカルドオである。資本主義制度の勃興しつつある英國のロンドンに於て生ひ立ち資本主義制度の心臟と云ふべき株式仲介人として成功せしユダヤ人たる彼は混頓として成立しつつある資本主義制度の中に於てよくその本質的機構を把握し得たのである。正統學派の人々はこの點に於て彼を繼承するものである。而して新正統學派の父と云はるるマーシャルに至つては幾多の發展を遂げたりと雖も而も其理論經濟學に於ける資本主義制度に對する安定期的態度に於ては變るところがない。例へば彼は價格論に於て「時の要素」を高調し一定の需要の狀態が一ヶ月續くか一年續くか、十年續くかによつて起る供給の狀態の變化を明にして居るのであるが、ここに Dynamic 動學と云はるるものは資本主義制度の構造內部に於ける動學であつて未だ眞の動學ではない。從つてそこに於て高調さるる「時の要素」は、變革期經濟理論に於て資本主義制度そのものの發展的構造を明にする眞の動學の理論に於ける時間が生物學的時間の性質を有するに對し物理學的時間の性質を有するものであると云ふことが出來る。

經濟史　安定期經濟學は資本主義を永久不變なるものと考へるのである故に、資本主義制度に對する數物學的經濟理論が最も本質的なる安定期的經濟學である。故に舊き正統學派は經濟學をここに限定せんとする。歷史學派なるものはこの正統學派經濟學に對する Antithese 反として現れた。卽ち正統學派經濟學が經濟的實在の Allgemeinheit 普遍性の研究のみを以て經濟學研究とするに對立してこの學派は經濟的實在の Besonderheit 特殊性を記述することを以て經濟學の眞の

研究であるとする。所謂事實を事實として記載すると云ふはこの立場である。然し特殊性であるところのものは單に歷史の素材たるに過ぎぬのであつて、眞に歷史的研究と云はるべきものはIndividualität 個性を明にすべきものでなければならない。個性とは普遍性と特殊性とを止揚した最も具體的なるものであつて[1]歷史の世界に存在するところのものは總て個性的なるものである。而して此個性は普遍性を特殊化することによつて初めて到達し得るものである故に經濟的實在の普遍性たる理論を無視するところに眞の個性研究卽ち歷史研究はあり得ない。これ等の人々は理論は歷史研究の歸納的結果に於て初めて得らるべきものであると考へる。而してそれは所謂經濟段階發展說である。我々はこの理論によつてこの安定期に於ける歷史研究の性質を一層明にすることが出來る。これ歷史研究の結果 Resultat として得らるべき歷史理論がまた其歷史研究のLeitfaden 指南針となることは單にマルクス史觀に限らるることでなく總の場合に於ても事實であるからである。卽ち經濟段階發展說に於ては例へば狩獵時代、牧畜時代、農業時代、商業時代、工業時代と云ふが如くに人生の經濟生活の型が發展の順序に於て並べられてゐる。それ故に經濟段階發展說の眼をもつて歷史が研究される時には、諸の經濟制度の完成期たる云はば各時代の山に注意が集中せられ其構造が順次に展開せられることが主要なる問題となる。卽ちここに主として明にされるところは各時代の制度の安定期的構造であつて前の時代と後の時代とをつなぐべき變革期の構造ではない。假令變革期が問題とされても、そこには變革期の立體的動的なる構造が

1) Hegel; Encyclopädie § 163 參照

十分明にされない。即ち變革期に於てはやがて次の時代の制度を表現するに至るべき生命が前の時代の制度の下に於て次第に成立し而してこの生命より次の時代の制度が表現さるるに至るべき最も動的なる構造が明にされる。加之そこに於てはまた最も個性的な構造が明にされるのである。例へば封建制度又は資本主義制度の安定期に於けるよりも封建制度より資本主義制度への變革期に於て各國の個性的なるものは最もよく現らはれるのである。歴史 Geschichte は Geschehen を意味し動的構造を明にすべきものであると共に個性的構造を明にすべきものであるが兩者はかくて最もよく變革期に現らはれる。然るに未だ制度の變革が眞劍の問題とならない安定期に於ては變革期に十分なる注意が拂らはれず從つて其歴史的研究全體が十分に個性的動的たることを得ないのである。

政策論　安定期經濟學に於ても政策論が見られぬではない。然し資本主義制度自體の變革が問題となつて居ない安定期に於ては政策の問題は資本主義制度の下に於て如何に經濟生活を都合よくなすべきかと云ふことのみが問題である。從つてそれは未だ學と云ふ程のものではない。故に理論的研究をもつて經濟學の本質的なるものであると考へた人々は政策をもつて其 application であると考へた。リカルドォの『經濟原理』に於てもこれを見ることが出來るのであるが、ゼー・エス・ミルに於て其最もよき例を見得る。即ち彼は其經濟原論に "Principles of political Economy with some of their applications to social philosophy" とした。即ち彼は政策的問題を彼の經濟理論

の application 應用として考へたのである。

獨逸の經濟學者は國家による政策を說いた。然し彼等と雖も資本主義の制度の下に於て如何に經濟生活を支配すべきかを主として問題としたのであつて未だ資本主義制度自體の變革を十分に問題として居ないのである。

四、變革期經濟學の構造

變革期經濟學の構造も變革期經濟學者の生の構造と聯關せしめて考察することが必要である。今や資本主義制度は、嘗て封建制度が變革期に入りしが如く、變革期に進んだのである。ここに資本主義制度は國民の生命の發展と矛盾に陷つたのである。安定期に於ては資本主義制度を保持する安定期經濟學は社會の人々の生命の發展を計る所以であつた、然るに資本主義が變革期に進むと共にその意識するとせざるとにかかわらず國民の生命の發展を無視し支配者階級にこびて自己一身の安泰を計る結果となるのである。かくて變革期に於ては社會の人々の生命の發展と矛盾に陷れる制度を人々の生命の新なる發展を將來すべき制度へ變革せんとする變革期經濟學を確立することが經濟學者の根本的使命でなければならぬ。この變革期の經濟學者には今や變革期に至れる經濟制度の生み出しつつある人間的不幸を默視し得ざる人間愛がなくてはならない。而してこの人間愛の故に資本主義制度を變革せんとする實踐的意圖がなければならない。然しかかる情

意のみにては眞に變革期經濟學者たることは出來ない。即ち彼はこの變革のために先づ知を致さなければならない。而して知を致すがためには物に格らなければならない。かくて彼には "Warm heart and cool head," がなければならない。

社會を變革せんとするものは、先づ自己が既にその下に於て生きて居る社會制度を、絶對不變なるものと考へる安定期經濟學者と異なり、歴史的發展の一段階として把握しなければならぬ。即ち彼は歴史的意識 das geschichtliche Bewusstsein の立場に立つのである。變革期經濟理論もかかる意識の下に成立つのである。

經濟理論　かくて變革期經濟理論は只に經濟社會の云はば横斷面たる組織的構造の研究に止まらず經濟社會例へば資本主義社會の發展的構造を把握するのである。これ即ち發展理論である。而して資本主義制度の成立發展沒落を研究したマルクスの資本論はこれが研究の代表的なるものである。而してこの變革期經濟理論は安定期經濟理論をその中に止揚する。即ち經濟的實在の云はば縱斷的研究たる發展的理論の研究は云はば其横斷的研究たる組織的構造の研究を待つて初めて學的に把握され得るものなるが故である。故にマルクスの資本論はこの意味に於てリカルドォの原論に於ける構造的研究を前提とするところのより具體的なる經濟理論である。

經濟史　變革期經濟理論に於て明にされしところのものは各國の資本主義に共通的なる發展構造であるが、各國の資本主義制度は各々個性的な存在であり變革せらるべきところのものはこの

ものである。かくて眞に資本主義を變革せんとする變革期經濟學は當然に個性的に存在する資本主義制度の個性的な變革的構造を明にしなければならないが、この爲めには其社會の總の變革期の個性的な構造を先づ明にするを要する。例へば現代日本の資本主義制度の個性的な變革構造を明にせんとせば日本の歴史上に於ける諸變革期の個性的な變革構造を明にすることを要するのである。卽ちここに於ては安定期經濟史に於けるが如く各時代の安定期のみでなく、一つの時代の安定期より他の時代の安定期に至る變革期が重要なる問題となる。而もまた一つの制度より他の制度に至る外面的なる變遷が問題でなく、其內面的動的なる變革的構造が問題である。卽ち其社會の人々の個性的なる生命より一つの制度が表現せられ、この制度の下に於て次の制度を表現し得べき意識が準備せられ、而してこの生命より次の制度が生れ出で來るところの內面的動的個性的な變革構造が明にされねばならない。而してかかる研究に於ては經濟的文化域の史的發展を他の文化域より離すことは出來ない。これこの歴史的把握の中心點となるところの個性的な生命なるものは總ての文化域の交叉點 Kreuzungspunkt として總ての文化域より規定せられて發展し行き、また總ての文化域に自己を表現するところのものなるが故である。かくて經濟史研究は經濟の域を中心とするところの文化史的研究でなければならぬ。かくの如き變革期經濟史研究は安定期的經濟史研究をその中に止揚する。卽ち各時代の安定期の構造が明にされて初めて各時代の安定期と安定期を結ぶ內面的變革期的構造が明にされ得るが故である。かくて變革期の經濟史は安定期

の經濟史研究をその中に止揚せしより具體的な研究であると云ふことが出來る。

政策論　資本主義制度の發展的理論並に發展史の研究は資本主義制度を變革すべき政策論の土臺をなす存在的研究である。次に進んでこの制度の社會の生命に對する價値を評定し Wertschätzung 而してこれが社會の生命に對して望ましからざるものであればこの制度をそれに向つて變革すべき目的たる制度を定立し Zwecksetzung 更にこの目的を實現すべき方策を附與 Regelgebung しなければならない。これ變革期の政策的研究である。卽ちかくの如き變革期の政策研究は安定期の政策研究がその制度の下に於て如何によく生活すべきかを問題とすると異なつてその制度自身を社會の人々の生命の發展に最も適切に如何樣に變革すべきかを課題とするのであつてそれは極めて重要なる學的研究をなすのである。變革期の政策論については嘗て述べたが更にここには一言するに止めた。[1]

私は以上に於て變革期經濟學に於ける經濟理論、經濟史、經濟政策の安定期經濟學のそれに對する一般的特徵を一言したのであるが、終りに特に注意すべきことは、既に述べたるところより明なるが如く、變革期經濟學に於てはこれ等理論、歷史、政策、の三部分が安定期經濟學に於けるとは異なり、內面的なる統一をなし一個の實踐學を構成せることである。卽ちそこに於ては經濟的實在の發展的なる普遍的構造を明にする經濟理論は直ちに此實在の個性的なる發展的構造を明にするところの經濟史研究の理論的基礎をなす。かくして具體的に得られたる經濟的實在の對

1）本誌八月號拙稿、「變革期の社會政策」參照

象的認識は直に、政策的研究に於ける實在認識的基礎をなす即ち其政策的研究に於ては以上の實在的認識に基きて此實在に對する價値評定、目的定立、方策附與をなすのである。かくてその全體は資本主義制度の適切なる變革を究明するところの一體としての實踐學を形成してゐるのである。既に述べたるが如く經濟學史上に於て最も重要なる體系はかくの如く制度の變革を問題とする實踐學的研究であつた。而して經濟學祖アリストテレスの實踐學は實踐學の一般的原理を示し、經濟學父アダム・スミスの『富國民論』は當時尙ほ封建的なりし社會より資本主義社會への變革期經濟學であつて、變革期經濟學としての最も具體的な體系を示せるものである。即ち第一第二兩編は經濟的實在を構造的に並に發展的に研究せる理論的研究であり、第三編はこれを土臺として當時の經濟社會の成立を研究せる歷史的部分であり、第四第五の兩編は以上に於て明にされし當時の經濟社會の價値批判、當時の社會がそれに向つて進むべき目的の定立及びこの目的が實現せらるべき方策の附與を含んで居る實踐的部分である。[1] マルクスの學的體系は資本主義制度の變革期經濟學として最も偉大なる存在である。然しそれはアダム・スミスに於けるが如き完成せるものではない。資本主義制度につきアダム・スミスの富國民論に於て見るが如き具體的なる變革期經濟學を確定することは現代經濟學者の最も重要なる使命である。

狹義の經濟學は經濟理論、經濟史、經濟政策より成るものであるが廣義の經濟學は更にこれ等狹義の經濟學を對象として成立つ經濟哲學、濟經學史、經濟學發展論を含むべきものであること

1) 拙著「精神科學的經濟學の基礎問題」第三編第七章參照

は嘗て論じたところである。[1] 而してこれ等のものについても、狹義の經濟學についてと同樣に安定的なるものと變革的なるものとを區別することは大切である。以下私はこれ等のものについて述べて見よう。

五、安定期經濟哲學と變革期經濟哲學

安定期經濟哲學　既に述べしが如く安定期經濟學に於ては與へられたる經濟的實在の變革と云ふことが關心とならず、只その實在の對象的把握又は解明 interpretieren のみが關心事である。從つてそこに見らるる經濟學的研究は經濟理論か又は經濟史である。安定期經濟學はかく簡單なるものなるが故に從つてまた安定期經濟哲學も亦簡單なものであつた。即ちそこに於ては經濟理論並に經濟史の認識論が重要課題とされた。此安定期經濟哲學の代表的なるものはリッケルト及リッケルトを祖述せし人々に於て見られた。嘗て我國に於て支配的であつた經濟哲學はこの立場にあつたものである。リッケルトより出て、更に一歩を進めんとせしマックス・ウェーバーに於ては實踐の學的研究の可能が問題とされるに至つたのであるが而もここには否定的の答が與へられた。[2]

變革期經濟哲學　變革期的體系に於ては經濟學の概念と共に哲學の概念自體もまた實踐的變革的となる。即ち變革期經濟學に於ては經濟的實在の變革が關心事である。故に經濟的實在の理論

1) 前揭本誌第二十五卷第四號拙稿參照
2) Max Weber, Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis

的研究並に歴史的研究のみならず、更にこれを基礎として經濟的實在の Fortgestaltung 形成發展を明にすべき實踐的研究、即ち經濟的實在に對する價値批判、目的の定立、方策の附與がなされねばならない。哲學は「思惟の徹底」を以つて本質とするものであるが故に、經濟哲學は經濟學に於ける此等思惟を徹底して經濟的實在の變革を一層適切ならしめんとするところのものである。而して思惟を徹底すると云ふことは思惟の本性である Begründung 基礎付 Zusammenfassung 聯關付を徹底的に求めることである。[1]

而して變革期經濟學に於ける思惟をノエシス的又は作用的方向に徹底すれば、それは變革期經濟哲學の認識論であつて、そこに於ては理論的認識、歴史的認識の外に更に價値批判、目的定立、方策附與の實踐的認識作用が聯關付け基礎付けられねばならぬ。而してこの聯關付並に基礎付の最後の基礎を置く Grundlegung ところのものは經濟的實在の實踐的本質である。而してこの本質を明にするところのものは經濟哲學の他の一面たる實在論である。

即ちこの實在論は經濟學に於ける思惟をノエマ的又は對象的方向へ徹底したところのものである。即ちそこに於ては變革期經濟學に於て認識せらるる諸種の對象が、基礎付けられ聯關付けられねばならない。先づ經濟理論、經濟史に於て認識せらるる經濟的實在の本質が、把握されねばならぬ。これ即ち歴史觀となる。かかる歴史觀なるものは安定期經濟學の立場に於ては經濟段階發展說として現らはれたのであるが、變革期經濟學の立場に於てはかかる制度の變遷と云ふ外面

1) 本誌第三十二卷第四號拙稿「デイルタイ哲學と經濟哲學」參照

的立場に止まるものではない。卽ちここに於ては生命が制度を表現しその下に生ひ立つて更にこの制度を破つて進み行くところの生命と制度との辨證法的發展に於て歷史の本質を把握する「生命史觀」又は「實踐史觀」が成立つ。變革期經濟學は此「生命史觀」の上に立つことによつて自己を安定期經濟學と決定的に區別するのである。次に經濟的實在を價値批判すべき價値標準の本質が明にされねばならぬ。卽ちここに於ては價値體系の中に於ける經濟價値の地位が明にされねばならぬ。次に經濟的實在がそれに向つて形成發展せしめらるべき目的社會の諸種の型並に本質及び他の諸目的に對する聯關がそれによつて明にされねばならぬ。最後にこの目的社會を實現すべき方策卽ち改革革命等の諸種の變革の構造、本質並に相互の關係が明にされねばならない。而してかくの如き存在論はまた經濟哲學の他の一面たる實踐的認識論をまつて十分に確定し得ることとなるのである。

六、安定期經濟史と變革期經濟學史

安定期經濟學史　經濟學史なるものは經濟學の史的發展的聯關を明にするものである。然るに安定期經濟學者は安定期經濟學をもつて本質的な經濟學であると考へ從つて經濟學の發展の中に於ける安定期經濟學の諸體系を重んじて經濟學の史的發展的聯關を究明せんとし而して變革期經濟學の體系は只それが安定期的經濟學に關係する點に於てのみこれを問題とするのである。かく

て安定期經濟學史に於ては例へばアモンに於けるが如く安定期經濟學者リカルドオをもつて經濟學の父であるとする。而してかかる立場にあつては偉大なる變革期經濟學者も安定期經濟學者と關係ある限りに於てのみこれを問題とするのであるが故に、ここにスミスの偉大なる變革的體系の意義が今日もなほ多くの人々に十分に意識され得ない所以がある。卽ち今日まで多くの人々はリカルドオ及リカルドオ以後の安定期經濟學の體系を通じ云はば安定期經濟學體系の小さき穴よりスミスの偉大なる經濟學體系をのぞいたのである從つてかくの如き見方よりしては『富國民論』の第一第二編の一部のみが經濟學として問題とせられ他の編殊に第四第五兩編の實踐的部分の深き意義が沒却せられ、又その全體系が有する實踐學としての經濟學の偉大なる意義が看過されざるを得なかつたのである。而してまたかくの如き人々はマルクスの偉大さをも認め得ない。

變革期經濟學史　これに反して變革期經濟學史に於ては變革期經濟學を最も本質的なる經濟學體系として經濟學史の聯關を求める。ここに於て初めて偉大なる變革的經濟學體系の有する意義を十分に理解し得るのである。卽ち社會の變革期に於ける偉大なる變革期經濟學は、一方其社會制度が變革期に至る以前にこの制度を鮮明すべく生れたる諸の安定期經濟學體系をより抽象的體系としてその中に含むるものである。而も他方此變革期經濟學は前の社會を次の社會へ轉向せしめんとするものなるが故に、次の經濟社會の考察が初めてそこに於てなされて居るのである。ここに於て變革期經濟學は彼に先立つ安定期經濟學の Resultat であると共に彼の次に來るべき次の

經濟社會についての經濟學的考察の Ausgangspunkt となるのである。ここにかかる偉大な體系がレンズに比喩さるる所以があるのである。[1] かくて經濟學諸體系の史的發展的聯關を明にすべき經濟學史に於ては偉大なる變革期經濟學を最も具體的なる體系として云はば時期を劃する目標たらしめ他の諸體系はむしろこの大柱と大柱との間をつなぐところのしめなはとして取扱ふ時ここに史的發展的全體に最と具體的な內面的聯關を確立し得るのである。今歐洲の經濟學史上に於てス、かくの如き意義を有するところの變革期的體系を求めるならば、先づ經濟學祖たるアリストテレ經濟學父たるアダム・スミス及びマルクスであると云ふことが出來るであらう。卽ち旣に述べしが如くアリストテレスは古代ギリシャの變革期に於てこの沒落し行くギリシャの社會を人倫的社會へ變革すべく現らはれたる變革體系であり、アダム・スミスの體系は一六六七年將に產業革命の始まらんとする年に於て未だ尙ほ中世的であつた經濟社會を資本主義社會へ變革すべく現れたる體系である。而してマルクスは資本主義經濟社會の變革期に於てこの行き詰まれる資本主義制度をより人間的なる將來社會へ變革せんとせし最初の而して最も偉大なる經濟學者である。

六、結言　現代日本の變革期經濟學

私の所謂廣義の經濟學體系の最後をなすものは經濟學發展論である。經濟學發展論とは現代の經濟學を如何に發展せしむべきかを問題とするものである。然るに以上述べ來りしことは要する

1) 拙著第三三六頁以下參照

に現代の變革期に於て經濟學を一般的に如何なる方向に發展せしむべきかと云ふことであつた。それ故に私はここに特に經濟學發展論一般について論をなす必要を見ない。然しこのことを特に我國について云ふならば、現代日本の變革期經濟學を確立することが重要なる問題である。

即ち現代の資本主義制度は今や我國民の生命の發展を壓迫しつつある。我々はこの國民の生命を眞に思ふ誠意より現代日本の變革期經濟學を打立てなければならぬ。かかる「生的基礎」の上に打立てらるべき現代日本の變革期經濟學は只に我國民の生命を發展せしむべき國民經濟學たるのみならず、更に進んで世界の各國民の生命の發展を重んずる世界經濟學でなければならぬ。而してこの經濟學の最後の「哲學的基礎」をなすものは「生命史觀」でなければならぬ。この生命史觀を地盤とする哲學的基礎の上に經濟理論と經濟學と經濟政策との內面的に相結ばれたる變革期經濟學を確立することが現代日本の經濟學者の任務である。ここに我々は歐洲經濟學の直譯時代より日本經濟學の創造時代に進むのである。